

青柳のはなし

文明年間（西暦一四六九—一四八六）能登の國の大名、畠山義統（よしのり）の家臣に友忠と云ふ若い侍があつた。友忠は越前の生れであつたが、若い時小姓として、能登の大名の屋敷へ引取られ、大名の監督の下に武藝を職とするやうに教育を受けた。生長するに従つて、文武兩道の達人となつたので、引續き君侯の覚えめでたかつた。快活なる性質と人好きのする應接ぶりと、それから甚だ立派な風采とを生れつきもつてゐたので、彼は武士仲間にも甚だ敬愛せられてゐた。

友忠が二十の頃、畠山義統の親戚京都の大大名細川政元へ内密の用向の使にやられた。越前を通つて旅するやうに命ぜられたので、この青年は途中、一人ぐらしの母を訪れる事の許しを願ひ出て、許可を得た。

出かけた時は、その年の最も寒い時であつた。雪は野山を蔽うてゐた。彼は強い馬に乗つてゐたが、進みのおそいことは仕方がなかつた。彼のたどつた道は山ばかりの所で、人家は少く、且つその間は遠く離れてゐた。彼の旅行の第二日目に、長時間の乗馬にくたびれたあとで、夜おそくまで目的の宿舎に着く事ができなかつたので、彼は當惑した。彼の心配したのも無理はなかつた。——烈しい吹雪が、恐ろしく寒い風を伴うて來て、馬は疲勞の徴しを表はして來たから。しかし、

その苦しい時に思ひがけなく、友忠は柳の木のある近い坂の上に茅屋の屋根を認めた。やつとの事で疲れた馬をはげまして、その家に赴いた。それから、風の入らぬやうにしめ切つてある雨戸を烈しくたたいた。一人の老婦人がそれをあけて、その立派な見知らぬ人を見て、氣の毒がつて聲をかけた、『まあ、お氣の毒、——若いお方がこんな天氣に獨りで旅をされて。……さあ、どうぞお入り下され』

友忠は馬から下りた。それから後ろの物置へ馬を連れて行つたあとで、その茅屋の中に入った。そこには老人と一人の娘が割り竹を焚いてあたつてゐた。彼等は恭しく、火に近づくとやうに友忠を誘つた。そして老人達は、お客のために酒を暖め、食物を用意しにかかつた。そして彼の旅行に關して質問もした。そのうちに、若い娘は屏風のうしろにかくれた。友忠は彼女の非常に綺麗である事を見て驚いた、——たとへ彼女の身なりはみすばらしく、又ほどいた長い髪は亂れてゐたけれども。彼はそんな麗しい女が、そんなに貧しいそして淋しい處に住んで居る事を不思議に思つた。

老人は彼に云つた、——

『お客様、つぎの村は遠うございます、それに雪もひどく降つてゐます。風は身を切るやうで、道は大變悪うございます。だから、今夜これからさきへおいでになることは、先づ先づ危うございます。このあばら屋はお泊りになれるやうな處ではございませんが、それに私共は御意に召

すやうなものを何もさし上げる事はできませんが、それでも今夜はこんな貧しい屋根の下でも御泊りなさる方が、或は安全でございませう。……御馬の方は私共が大切に御世話致します」

友忠はこの謙遜な申し出でを受けた、——内心かうしてもつとこの若い女を見る事の機會が與へられたのを喜んだ。やがて粗末ながら澤山の食事が、彼の前に置かれた。そして少女は屏風のうしろから酒の給仕に出て來た。彼女はもう粗野ながらさつぱりした手織縞の着物に着かへてゐた。そして長い下げ髪は、綺麗に櫛で撫でつけてあつた。彼女が酒を注ぐために屈んだ時、友忠は彼女がこれまで見たどの女よりも比較にならぬ程綺麗である事を見て驚いた。そして彼女の一舉一動には、彼を驚かさしとやかさがあつた。しかし老人達は彼女のために云ひわけをし始めた、『旦那さま、私共の娘の青柳はこの山中で、殆んどひとり育てられましたので、上品な作法は何も存じません。どうか愚かでもの知らない事を御赦し下さい』友忠はそれをさへぎつて、そんな綺麗な乙女に給仕される事を幸福と思ふと云つた。彼は彼女から眼を脇へ向けることができなかつた、——感心して見つめてゐては、彼女を赤面させるだらうと知つてはゐたけれども、——そして彼は前にある酒や肴に手をふれなかつた。母は云つた、『旦那様どうか少し飲んだり、喰べたりして戴きたうございます、——この斬るやうな風で、冷えなさつたに相違ありませんから、——この百姓の食物はまことにまづいものばかりでございますが』それから老人達の氣に入るやうに、友忠はできるだけ飲んだり、喰べたりした。しかし顔を赧らめて居る少女の愛らしさは益々彼の心を引きつけた。彼は彼女と話した。そして彼女の言葉は彼女の容貌と同じく麗しい

事が分つた。山の中で育つたと云ふ事は、或は本當かも知れない——しかしそれなら、彼女の両親はいつかは高位の人であつたに相違ない。彼女は身分ある人の娘のやうに語り、且つ振舞つたから。突然彼は彼女に歌を詠みかけた——それがやはり問であつた——彼の心の喜びに動かされて、

尋ねつる花かとしてこそ日をくらせ

明けぬになどかあかねさすらん

一刻のためらひもなく、彼女はこんな歌で答へた。

出づる日のほのめく色をわが袖に

つつまば明日も君やとまらん

そこで友忠は彼女が自分の賞讃を受けてくれた事を知つた。そしてその歌の文句が表はした保證を喜ぶと共に、彼女の感情を歌に表はす技倆にも同じく驚いた。彼は今日の前のこの田舎娘よりも、もつと綺麗な伶俐な少女に遇ふ事はとても望まれない、ましてわがものとする事は一層望まれない事を知つた。そして彼の心のうちの聲は熱心に『神佛が自分に授けたこの幸福を取れ』

と叫んで居るやうであつた——要するに、友忠は魅せられてしまつた——何等の前置きもなく老人夫婦に、娘を自分にくれることを願つた程魅せられたのであつた。——同時に彼の名と血統と、能登の大名の家來のうちでの彼の位地とを彼等に告げて。

彼等は有難さの驚きの歎聲を度々あげて、彼の前にお辭儀をした。しかし、しばらく躊躇したやうなやうすのあとで、父は答へた、——

『お客様、あなたは高い位地のお方でございます。そしてもつと高い位地へお登りになる事と存じます。あなたが私共へ與へて下さる御恩は大きすぎます、——全く、私共のそれに對して有難く思ひますその心の深さは申しつくされません。量る事もできません。しかし私共のこの娘は賤しい生れの、愚かな田舎者でございます、何のしつげも教育もございませんので、立派なお侍の御家内に致しますのは、不相應でございます。こんな事をお話し致す事さへ實に以ての外でございます。……しかし、娘がお氣に入ります、田舎育ちをお赦しになり、又甚だ無作法なをお見逃し下さると云ふ事であれば、私共は喜んで數ならぬ御側づかへとしてさし上げます。それ故娘の事は思召し通りにお任せ致します』

朝になるまでに、嵐は納まつた、そして日は雲なき東から現れた。たとへ青柳の袖が、彼女の愛人の眼からあかつきの薔薇色をかくしたとしても、彼はもはやとまづては居られなかつた。しかし、又彼は娘と別れる事は耐へられぬ事であつた。そして旅行の準備が一切できた時、彼はかう云つて彼女の兩親に話した、——

『これまでお世話になつた上、更にお願するのは恩知らずのやうですが、お嬢さんを下さるやうに、もう一度お願ひしたければなりません。今お嬢さんと別れる事は、私には中々できません。それでお嬢さんも私と一緒に行く事はおいやではないのですから、差支へなければ、このまま私はおつれして参りたい。お嬢さんを下さつた上は、私はあなた方を私の両親と思つていつも大切に思ひます。……それはとにかく、あなた方の御親切なもてなしの御禮までに少々ながらこれをお受けになつて下さい』

さう云つて、彼は彼の謙遜な主人の前に黄金の包みを置いた。しかし老人は度々平伏したあとで、その贈りものを押しかへして、云つた、——

『御親切な旦那様、黄金は私共には何の使ひ途もございません。あなたは長い寒い旅の間、多分それが必要でございませう。ここでは私共は何も買ひません。そして私共はたとへ買ひたくとも、私共のためにお金をそんなに費ふ事はできません。……娘の事は、もうあなた様に差上げたものでございますから、——あなたのものでございます。それ故つれて行つて下さるのに、別に私共の許しをお求めになるに及びません。もうすでに娘はあなたのお伴をしたい、そしてお氣に召す間はあなたのはしためとなつてゐたいと私共に申しました。あなたが娘を引き取つて下さると云ふ事を聞いて、私共は喜ぶばかりでございます。どうか私共のために御心を惱まして下さらないやうお願ひ致します。ここでは娘に相應な身なりを整へてやる事はできません、——支度金はな

ほざら整へられません。その上、老人のこと故、何れ遠からぬうちに娘と別れねばなりません。それ故今あなたが娘をつれて行つて下さると云ふ事は、大層仕合せでございます」

友忠が老人夫婦に贈りものを受けるやうに説かうとしても駄目であつた。この人々はお金を何とも思つてゐない事が分つた。しかし友忠は老人夫婦が、娘の一生を彼に託する事を實際望んで居る事を知つた。そこで彼女を彼の馬に乗せて、心からの感謝の言葉を幾度か云つて、老人夫婦に當分の別れを告げた。

『お客様』父は答へた、『感謝すべきは、あなたでなく、私共でございます。あなたが娘にやさしくして下さる事を信じてゐますから、娘のために心配する事はございません』……

〔ここで、日本語の原文では話の自然の進行に妙な故障がある、それで話が變につじつまが合はなくなつて居る。友忠の母や青柳の両親や、能登の大名についてはこれ以上何にも云つてない。明らかに著者はここで仕事に倦きて來たので、無頓着にその話を進めて、その驚くべき結末に急いだのである。私はこの省略を充たす事も、構造の缺點を補ふ事もできない。しかし説明になる詳細な點を少し入れて見る。それがなければあとの話がまとまらないから。……友忠は輕卒にも青柳を京都へつれて行つて、そしてそこで面倒な事が起つたらしい、しかしその後どこで暮らしてゐたか書いてない〕

……さて侍は君侯の承諾がなくては結婚はできないもの。そして友忠は自分の使命が果されないうちはこの許可は得られさうにはなかつた。そんな事情の下に、友忠は青柳の美貌は危険な注意を引きはしないか、又彼女を彼から奪ひ取るための策が講ぜられはしないかを恐れる理由があつた。それ故京都では彼女を物珍らしい目から隠すやうにつとめた。しかし細川侯の家來が或日青柳を見て、彼女と友忠との關係を發見した。そしてその事を大名に報告した。そこで——若い殿様で、綺麗な顔がすきな——大名はその少女を御殿へつれて來るやうに命じた。彼女はいきなり無理にそこへつれられた。

友忠は非常に悲しんだ、しかし彼は自分が無力である事を知つた。彼は遠國の大名に仕へて居る卑しい使者に過ぎない。そして今はそれよりもつと有力な大名の思ひ通りになつて居るのであつた、その人の意志は如何ともする事はできない。その上友忠は自分は拙い事、——武士の法規の禁する内縁を結んで自ら不幸を招いた事を知つた。今彼に取つては一縷の望、——絶對絶命の望——しかなかつた。それは青柳が望んで自分と一緒に逃げ出す事ができるかどうかと云ふ事であつた。長い間考へたあとで、彼は彼女に手紙をやつて見る事にきめた。この企ては勿論危険であらう、彼女にやる書きつけは何でも大名の手に落ちさうであつた。そして、御殿の中に居る人に戀文を送る事は赦し難い犯罪であつた。それでも彼はその冒險を敢てしようと思つた。そして、詩の形にして手紙を書いて、彼女に傳へる事を工夫した。詩はただ二十八字であつた。しか

し、その二十八字で彼は彼の熱情の深さを悉く表はし、彼の網望の凡ての苦しみをほのめかす事ができた、――

公子王孫逐_{譯註一}后塵_二

綠珠垂_レ淚滴_二羅巾_一

侯門一入深_レ如_レ海

從_レ是蕭郎是路人

この詩の送られたそのつぎの日の夕方、友忠は細川侯の御前に呼び出された。青年は直ちに自分の祕密が裏切られたと疑つた。そして、彼の手紙が見られたのなら嚴罰を逃れる事は覺束ないと思つた。『今度は私に死を命ずるであらう』友忠は考へた、――『しかし青柳が私にかへらぬ以上生きてゐたくない。その上死刑の宣告が下つたら、私はせめては細川を殺すやうにやつて見る』彼は兩刀を帯にはさんで、御殿へ急いだ。

謁見室に入つて友忠は細川侯が、禮服禮帽をつけた高位の侍にとりまかれて上段の間に坐して居るのを見た。一同は銅像のやうに黙つてゐた。友忠が敬禮をして進む間、その寂として居る事は彼には氣味悪く重苦しく思はれた。丁度嵐の前の靜けさのやうに。ところが、突然細川は上段

の間から下りて、青年の手をとつて『公子王孫逐后塵、、、、』の詩の文句をくりかへし始めた。……そして友忠が見上げると、君侯の眼にやさしい涙が見えた。

それから細川は云つた、——

『互にそれ程愛し合つて居るから、自分は親戚能登守に代つてお前の結婚を許す事にした。それでお前の結婚は今自分の面前で行ふ事にする。お客は集つて居る、引出物も用意してある』

君侯よりの合圖で、向うの部屋を隠してあるふすまは開けられた。そして友忠は儀式のために集つた殿中の澤山の高位高官の人々、及び花嫁の衣裳を着て、彼を待つて居る青柳を見た。……かくして彼女は彼にかへされた、——婚禮の儀式はにぎやかに且つ立派であつた、——それから貴重な引出物は君侯及び君侯の一族の人々によつてこの若い夫婦に贈られた。

* * *

その結婚の後、五年間友忠と青柳は楽しく一緒にくらしした。しかし或朝青柳は何か家事向きの事について、夫と話して居る間に不意に苦しみの叫びを發して、それから眞青になつて動かなくなつた。しばらくして、弱つた聲で彼女は云つた、『こんなに失禮に叫び出した事を赦して下さい——そんなに急に痛み出したのです。……あなた、私共が一緒になつたのは前世の何かの因縁からに違ひありません、その有難い縁でこれからさき何世も、私共は又一緒になれると思ひます。しかし私共のこの今の世ではその縁は今終りました、——私共は別れる事になります。どうか私

のために念佛を唱へて下さい、——私はもう死にかかつてゐますから』

『おい、何を變な妙な事を考へてゐるのだ』驚いた夫は叫んだ、——『お前はただ少し病氣なのだ、ね——……少しお休み、そしたら直る』……

『いゝえ、いゝえ』彼女は答へた——『私は死にます。神經ぢやありません、——私に分つてゐます、……そして今では、あなた、本當の事を隠して置いてもう駄目です、——私人間ぢやありません。木の魂が私の魂です、——木の心が私の心です、——柳の養分は私の生命です。そして今、この意地の悪い時、誰か私の木を伐り倒して居るのです、——それで死なねばならないのです。……泣く事も今では私の力に餘ります……早く早く私のために念佛を唱へて下さい。……早く……あゝ』

もう一度苦しみの叫びをあげて彼女は綺麗な頭をわきへ向けて、袖の下に顔をかくさうとした。しかし殆んど同時に彼女の全身は最も不思議な風に消えて、段々下の方へ下の方へと沈んで行つて——床と同じ高さになつて行くやうであつた。友忠は彼女を支へるために飛び出した。——しかしそこに支へるものは何にもなかつた。疊の上には美しい人のもぬけの着物と髪につけてゐた飾りだけしかなかつた。からだは影もかたちもなくなつてゐた。……

友忠は頭を剃つて佛門に入り、雲水の僧になつた。諸國を行脚して、聖地を訪ふ毎に青柳の魂

のために、祈りをあげた。巡禮の間に越前に着いて彼の愛人の両親の家をさがした。しかし両親の家があつた山の間の淋しい場所に着いた時、その家は既になくなつて居る事を見出した。家のあつた場所のしるしになるものさへ何にもなかつた。ただ三本の柳の切り株があるだけ——二本の老木と一本の若木と——それが彼の着くずつと以前に伐り倒されたのであつた。

それ等の柳の木の株の側に彼は諸々の經文を彫刻した塚を建てた。そしてそこで青柳及び彼女の両親の魂のために多くの佛事を行つた。

譯註一 唐の詩人崔郊の名高い詩。崔郊は一旦奪はれた愛人をこの詩によつてとりも

どす事ができた。

(田部隆次譯)

The Story of Aoyagi. (Kwaidan.)